

# シラチャ校だより

泰日協会学校  
シラチャ校  
2019. 2. 28



## 「碎啄同機（さいたくどうき）」

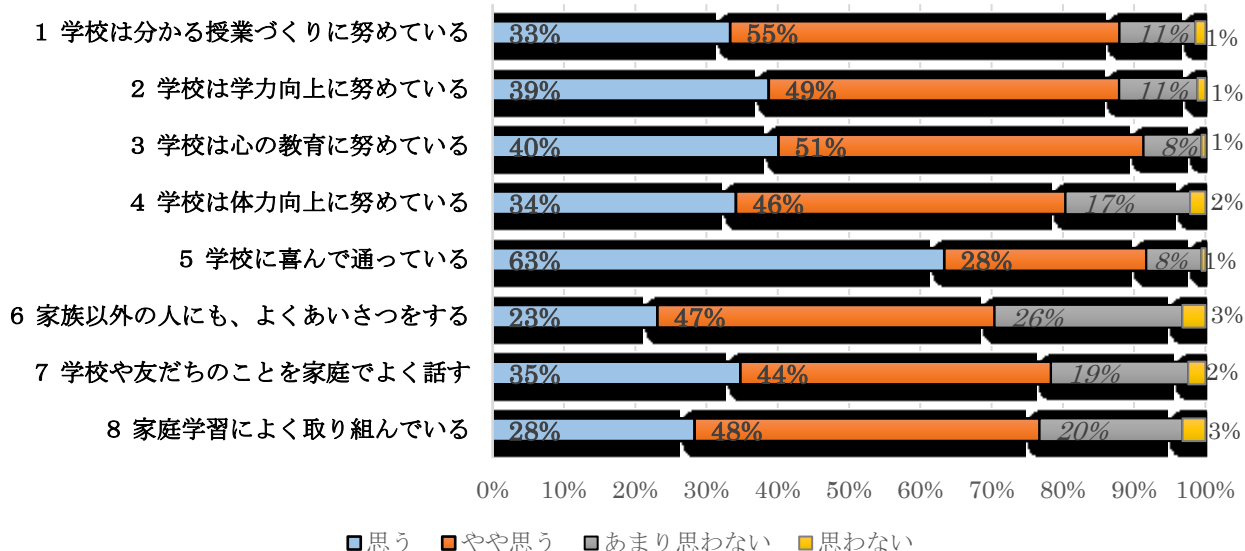
泰日協会学校シラチャ校 校長 久光靖男

2月の半ばに、校庭の「マック オーガニー」の一本の木が、すごい勢いで葉を落とし始め、2日ですっかり葉がなくなったかと思うと、新しい葉が2日できれいにそろい、若葉で一杯になりました。日本では冬を前に広葉樹が葉を落とし、冬を耐えて春までじっと待つというのが常なので落葉の常識が大きく変わりました。さてシラチャも季節が乾期から暑期に近づき、少しずつ日差しも強くなっているように感じます。一日として同じではないと感じる、昨今です。

日々変わる自然の中であって、教育はまさに碎啄同機（卵の中で雛が殻をつついて外に出ようとしている。それに合わせて母鳥が外から殻にひびをいれる）の繰り返しです。卵の内側の雛を意識せず、外から働き掛けてもなかなかひびは入らないものです。視点を変えると雛が内側からその合図を出す(内的動機付け完了)、その瞬間を大人がじっと見守る強さが求められているとも言えます。卒業式、修了式が近づいてきました。それぞれの成長を確かめながら、次の学年に向けて希望がもてるようにまとめの学習が進んでいます。

## 学校評価から（2）

### 児童生徒及び学習に関すること



前回の学校評価に続き児童生徒及び学習に関する項目についてです。思う、やや思う、の項目を見ると70%～80%となっています。特に低い項目として「家の人以外へのあいさつ」、「友だちのことを家庭で話すか」、「家庭学習」の項目があります。家での様子から率直に判断されているのが伝わってきます。タイでの環境を考えながら、学校と家庭とがいつそう連携していくことが求められていると感じています。今後もご支援、ご協力をお願いいたします。

# ジャンタブリ臨海学校を終えて

～小学部5年～

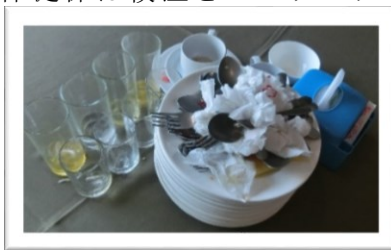
## ①遠泳

5年生ではジャンタブリ臨海学校に向けて、平泳ぎを重点的に練習してきました。平泳ぎがうまくできない子もいましたが、1年間かけて粘り強く練習してきました。今では、5年生の8割以上の子がきれいなフォームで長い距離が泳げます。この割合は、日本で生活する子どもよりも圧倒的に高く、大変すばらしいことです。(ベネッセ全国調査5年生48%)たくさん泳げる子だと、1時間の授業でバディで900m(18往復)も泳いでいました。この練習の成果を出すのがジャンタブリの海です。今年は少し波もありましたが、波にも負けずにがんばって泳ぎきることができました。泳ぎきった後の清々しい表情は忘れられません。この遠泳を通して、バディを気遣い、同じペースで泳ぐ協調性、最後まであきらめない忍耐力を学べたと思います。普段の学校生活にも生かしていきたいです。



## ②係活動

係は班長、副班長、保健、生活、食事の5つに分かれて活動しました。班長は時間管理や式の進行を務めました。始めは5分前行動、3分前集合ができませんでしたが班長の意識の高まりもあり、全員が意識できるようになりました。副班長は鍵の管理を責任をもって行い、部屋の人が助かりました。保健係は検温とビーチレクを運営しました。ビーチリレーと



ビーチドッジボールをみんなで楽しめたのも保健係のおかげです。生活係は整頓と、ビーチファイヤーを企画しました。ビーチファイヤーではみんなで盛り上がりました。食事班は班での「いただきます。」のあいさつや、片付けをしていました。食後にお皿などを片付けやすく整頓して帰る姿に、ホテルの方も感心していました。係活動では責任感を伸ばすことができました。

## ③友達との絆

寝食をともにした仲間、遠泳をともに乗り切った仲間との1泊2日の思い出を大切に、これからも絆を深めていってほしいことを願っています。

(文責：林口 晃)



## 私のおじいさんは・・・

私の祖父(父方)は、私が産まれる前に亡くなってしまったので、私は祖父のことを全く知らないまま幼少期を過ごしました。両親も祖父の話をするのは滅多にありませんでしたし、私も会ったことのない祖父のことを特に意識することなく生活していたので、祖父のことを知る機会がほとんどなかったのです。

私の家族は国内外問わず、よく旅行をしていました。その中でも日本のお隣の国、「韓国」へ年に一回旅行へ行くのが、家族の習慣となっていました。小さい頃は、特に気に留めることもなく韓国旅行を楽しんでいたのですが、小学校6年生になった時に、ふと「何で韓国ばかり行くのだろうか?」と思い、父に聞いてみました。その答えを聞いた時の驚きは今でも忘れません。なんと父のお父さん、つまり私の祖父が韓国人だということです。「え!おじいちゃん韓国人だったの!?!」という驚き半分、「お父さんが家でよくキムチを漬けていたのはそういうことだったか。」という納得半分でした。家族のこと、そして自分自身のことについて知らないことがまだまだあるのだということ強く知った出来事でした。

今、2年生の生活科の授業では、「あしたへジャンプ」という学習をしています。子どもたちが自分の産まれた時の様子や産まれる前のことなどをお父さんやお母さんにインタビューして、それを成長アルバムとしてまとめています。「自分が全く知らなかった自分自身のこと」を親から聞いた子どもたちはとても嬉しそうな様子でアルバムにまとめています。自分のことを全く知らなかったことに対する驚きと、自分についての新たな発見ができた喜びを感じることができたのではないかと思います。

私自身の経験や子どもたちの様子を見ていて感じたのは、家族のことや自分自身のことをみんな意外と知らないまま生活しているということです。何か特別な機会やきっかけがなければ、知れないことが多く存在するのだと思います。家族団らんの時間などに、お子様が小さかった時のことや産まれる前のことなどを少し話してみるのも良いのではないのでしょうか？

(文責:伊藤 知也)

### 空想に浸る時間を…

突然ですが、子どもの頃、夢を思い浮かべることが大好きでしたか？ふわふわの雲に寝そべって、わたあめの雲を食べたり、本や映画などの異世界で冒険をしたり……。まさに空想の世界です。空想は、全く根拠をもちません。ですから、自分の思い描いたことができ、思い描いたことが起こる、純粹に面白い世界です。

国語の学習でも、空想の世界の冒険を書く活動があります。書いている子どもたちが、その世界に入り込んで、ちょっとにやにやと笑っていることもありました。出来上がった物語は、ときどき、はらはら、そしてやっぱり空想の世界ならではの現実ではありえない展開に自然と笑顔があふれていました。

そんな素敵な世界観をもっている子どもたちと毎日接していると、なにかあったときに「現実的ではない」と片付けてしまうのではなく、「ゆめ」を追い求める時間や空間を保障してあげることも大切だと感じています。ぼーっとしているように見えても、空想の世界では楽しくはしゃいでいるのかもしれない。

忙しい子どもたちに、空想に浸れるようにたくさん本を読んだり、話を聞かせたりする時間や場所を大人が与えられるといいです。(文責:城間 功太郎)